キリストの再臨を待ち望む信仰

ヨハネ黙示録19章5～8節
2022年11月27日
松田 基子 師

教会には教会の暦である教会歴があります。
『生活の中に、イエス・キリストへの信仰が、しっかりと根付くように、イエス様の生涯を、1年52週に振り分けて、年中**イエス様の生涯を思い描いて生活する**為の暦です。』
それはいきなり、イエス様の誕生から始まるのではありません。 神様の約束であるメシア・救い主の来臨を待ち望む**待降節から始まります**。
キリスト教辞典にある、日本キリスト教団の教会歴には、**待降節**から始まって**降誕日**、**公現日**、**灰の水曜日**、**四旬節**、**棕梠の主日**、**受難週**、**洗足木曜日**、**受難日**、**復活日**、**昇天日**、**聖霊降臨日**、**三位一体主日**が決められています。

その後の日曜日は、三位一体後、第何主日と数えています。 今日はその待降節第1主日に当たります。 教会の新しい1年の始まりです。
しかしそれは、日本の正月の様な気分で迎えるべきものではありません。 待降節は、ラテン語で、**アドベント**と言います。 **来臨**の意味です。
来臨、それは勿論、救い主イエス・キリストの来臨であるクリスマスを意味しますが、二千年前、人の世に生まれて来られた神の御子イエス様は、全人類の罪の贖いの十字架に架かり、復活し、人類救済の道を開かれると、永遠の世界へ、神様の**権威執行者**として、神様の右の座に着かれる為に昇天されました。 その時イエス様は、
「もう一度世界を審**くため**に地上に来られる、**再臨を約束**されました。」
ですから、イエス・キリストの最初の来臨が、既に、成就した今の時代の待降節は、救い主が与えられた事を感謝し、喜ぶと共に、イエス・キリストの再臨に備える時です。

今朝も、ご一緒に使徒信条を告白しましたが、その告白の一文は、
「かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん」
です。 そこにはイエス・キリストによる、神の審きが成されることが記されています。 しかし、私達は、神の審きと聞きますと、自分の生ぬるい信仰生活に、
『神様の前には顔を挙げられない、立てない。』
と恐れを感じてしまいます。 勿論誠実な信仰生活は必要です。 しかし、待降節は、そう言う鞭を当てて、恐れさせるためのものではありません。
ヘブライ人への手紙9章27節には、
「また、人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっているように、キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです」
とあります。

イエス・キリストの再臨の一番の目的は、御自分を待望している人達に、救いをもたらすために来て下さるのです。
そこで問われていることは、
『良い信仰生活を送っているかどうか』
と言う事ではなくて、
『イエス・キリストが再び来られる**再臨に対する信仰**を持って、**イエス様を喜び待ち望んで**いるかどうかが問われます。』
しかし、イエス様が天に帰られてから、早や、二千年が経ちました。 今日までイエス・キリストの再臨は起こっていません。 その為に、今日の日本のキリスト者に最も欠けていることは、
『**再臨への期待**、待望が**薄れている**事』
ではないでしょうか。

ペトロはペトロの手紙Ⅱの3章4節以下で、
「主が来ると言う約束は、一体どうなったのだ。 父たちが死んでこのかた、世の中のことは、天地創造の初めから何一つ変わらないではないか。」
との声に対して、3章8節で、

「愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。 主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。 ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を送らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。 主の日は盗人のようにやって来ます」
と警告をあたえています。 イエス・キリストの**再臨に対する待望のないキリスト信仰は、真に信仰に生きているとは言えません。** 今朝はそこに信仰を探られます。

今朝与えられている聖書箇所は、迫害の最中、イエス・キリストの再臨を切望する、キリスト者達に、天からの黙示、つまり天上の秘密を示されたヨハネが、その幻で見た事を記したヨハネの黙示録です。 黙示録と言うのは、迫害の最中、その状況を実名で表現する事は、命の危険に関わる事であったために、秘密のベールを掛けて表現しています。 過去の人物名を使ったり、過去の事物、列強の名を使って、その罪を非難し、滅亡を預言したものです。
その表現の仕方は、天上の世界と繋がっていて、巻物やラッパ、金の鉢、封印、龍、動物、女性など、多くの表徴(シンボル)を使って表現されています。ヨハネの黙示録は、ヨハネと名乗る伝道者がパトモス島に捕らわれていた、ある主の日、霊に満たされて、天上に引き上げられ、天上におられるキリストの姿を見ると共に、秘密の啓示を受けた事を記したものです。

パトモス島は、エーゲ海に浮かぶ、エフェソから西南90キロの地点にある小さな島です。
ローマ帝国の流刑地でした。ヨハネはパトモス島に捕らえられる前、小アジアの7つの教会に関係し、霊的導きを与えていたと思われます。
彼はその7つの教会に対して、この黙示録を記しました。 ところで、イエス・キリスト御自身が、この世の権力者から憎まれました。それは人間の罪の現れでしたが、彼らから迫害され、十字架に架けられました。 この世界は、神様に背く、自己中心、人間中心の世界です。 特に権力者は、自分を絶対者、神として、同じ人間を自分の目的の為に支配し、隷属させます。

ローマ帝国の皇帝は、地中海世界を次々に武力で制圧し、その中心都市に皇帝の像を建て、神として皇帝礼拝を強要しました。 その事は、イエス・キリストを自分の全存在の主としているキリスト者にとっては、受け入れられないものでありました。 彼らは皇帝礼拝を拒否しました。
その事はユダヤ教から異端視されていることで、ローマ帝国内で問題視されていた上に、更なる非難を受け、迫害を受けました。
著者ヨハネがパトモス島に流刑になったのは、紀元81年から96年に、皇帝であったドミティアヌス帝の時代であったであろうと言われています。

ドミティアヌスは神経質で、猜疑心が強く、物事に厳格で、多くの人を処刑しました。 その結果、自分自身が暗殺されてしまいました。その様な治世に、キリスト者は犠牲になりました。
神様は何故その様な悪を野放しにされているのだろうか。 この様な時代が、いつまで続くのだろうか。 迫害に耐えて心が折れてしまうキリスト者達にヨハネは、神様のこれからの御計画の啓示を受け、そこに見た幻を書き記したのでした。

今朝の聖書箇所は、黙示録の終わりの部分で、キリスト者を迫害したローマ帝国を意味する、バビロン滅亡の預言です。 バビロンは曾て(かつて)メソポタミヤからパレスチナまでその権勢を誇り、イスラエルもバビロンに滅ぼされ、バビロン捕囚の身となりました。 しかし、その権勢は、いつまでも続きませんでした。 紀元前539年、バビロンはペルシャに滅ぼされてしまいました。
それは世界の真の支配者、歴史の真の導き手は、天地万物を創造された、主なる神様である事の証明でした。 神様はバビロンと同じ様に驕り高ぶったローマ帝国も滅ぼされるのです。

18章は、天使の言葉で、これから起こる事が

先取りして語られています。 18章2節に、
「**天使は力強い声で叫んだ。**
『倒れた。 大バビロンは倒れた。
そして、そこは悪霊どもの住みか、
あらゆる汚れた霊の巣窟、
あらゆる汚れた鳥の巣窟、
あらゆる汚れた忌まわしい
獣の巣窟となった』」
とあります。 つまりそこは、
『人間の住むことの出来ない廃虚となり、
悪の霊の住処となる』
と言う預言です。 5節には、
「**彼女**(つまり、バビロン、ローマ)**の**
罪は積み重なって天にまで届き、神は
その不義を覚えておられるからである」
とあります。 キリスト者は迫害の中にあって、その受ける苦しみを、神様にどれ程訴えて来たことでしょうか。 しかし、状況は一向に変わらず、迫害する者は愈々富み栄え、高ぶり、自分達の思い通りに事は進んで行くのです。

彼らは、
『神様は全てを見ておられるのだろうか。
正しい審きは成されないのだろうか』
と思ったことでしょう。
『まだですか。 いつまでですか』
と神様に訴え続けたことでしょう。
全ての苦しみは、人にではなく、神様に訴えて行ってよいのです。 神様が時を定めておられ、神様の時は必ず来るのです。 神様は双方を決して見逃しておられるのではありません。 御自身を信じる者には、一層愛の目を注ぎ、上からの力と、逃れる道をお与えになります。 神様を恐れず、自らを神として、傲慢に振る舞う者達の、全てを、神様は見ておられ、罪の枡目が達したとき、神様は厳正なる審きを下されるのです。
キリスト者は、その神様を信じて苦しみを持ち堪えるのです。

一人で戦うのではありません。 十字架に架かり、復活して、罪に勝利されたイエス様が、常に共にいて、迫害の十字架を、一緒に担いでいて下さるのです。 イエス様は、マルコ福音書13章13節で、
「**わたしの名のために、あなたがたは**
すべての人に憎まれる。 しかし、
最期まで耐え忍ぶ者は救われる」
と約束して下さいました。 キリスト者はこの世の限られた世界を、限りある低い目線で生きるのではなく、**神様の御支配、永遠の高きに目線をあげて生きる**のです。 その信仰に生き抜く者に与えられる恵みは何でしょうか。 ヨハネは天上の世界を見ました。 19章5節に、天使の言葉が記されています。
「**また、玉座から声がして、こう言った。**
『すべて神の僕たちよ、神を畏れる者たちよ、
小さな者も、大きな者も、わたしたちの神を
たたえよ』」
天使は天上でも地上でも、神様を信じる全ての人が**神様を誉め讃えるように**と、呼び掛けています。」

6節には、
「**わたしはまた、大群衆の声のようなもの、**
多くの水のとどろきや、激しい雷のようなもの
が、こう言うのを聞いた。
『ハレルヤ、全能者であり、わたしたちの
神である主が王となられた』」
とあります。 正に、ここには、ハレルヤコーラスの先取りが記されています。 因みに、私たちは今年のクリスマスにハレルヤコーラスを歌いますが、ヘンデルは、ハレルヤコーラスをこの
黙示録19章6節の、
「**ハレルヤ、全能者であり、わたしたちの**
神である主が王となられた。」
11章15節の、
「**この世の国は、我らの主と、そのメシアのも**
のとなった。 主は世々限りなく統治される。」
および、19章16節の、
「**この方の衣と腿のあたりには、**
『王の王、主の主』
という名が記されていた」
から作っています。

天上では既に、イエス・キリストによる完全な支配が決定しました。 キリスト者は、大群衆となってキリストを、

「**ハレルヤ、神をたたえよ**」

と讃美するのです。 7節には、

「**わたしたちは喜び、大いに喜び、**
神の栄光をたたえよう。 小羊の婚礼の
日が来て、花嫁は用意を整えた」

とあります。 遂に、神様の時が来て、地上の悪が滅ぼされ、神の国の祝宴が始まるのです。神の国の統治者は、勿論神様であり、神の御子イエス・キリストが神様の右の座で、執行権を行使されるのですが、その時、迫害を耐え忍んだキリスト者に、大きなおおきな祝福が与えられるのです。

イエス様は神の子の命をもって、十字架に架かられましたが、それは人類の罪の贖いのための犠牲の小羊であられたことを意味していました。そこで天使はイエス様のことを

「**小羊**」

と呼んで

「**小羊の婚礼の日が来た**」

と伝えています。 では、小羊であるイエス・キリストの花嫁は誰でしょうか。 勿論イエス・キリストを信じ続け、従い続けた**キリスト者達、教会です**。

天使は、

「**花嫁は用意を整えた**」

と言っています。 婚礼のための花嫁の用意それは花嫁衣装でしょう。 8節に、

「**花嫁は、輝く清い麻の衣を着せられた。**
この麻の衣とは、聖なる者たちの
正しい行いである」

とあります。 花嫁衣装は、織り目の細かい、輝く、眩い、純白の衣です。 迫害に耐え、直すら天を仰ぎ、キリストの再臨を疑うことなく、待ち望んだ信仰は、神様の前に、輝く眩い、純白の衣装に織り上げられていたのです。

旧約聖書において、神様とイスラエルは、婚姻関係で現されています。 新約聖書では、イエス・キリストと教会が、エフェソ5章22節以下や、また、第二コリント10章2節に、記されていますように、婚姻関係で現されています。キリスト教の歴史は、どんなに迫害を受けても、イエス・キリストの再臨を信じ、やがての日には、天国の婚礼に、祝宴に、キリストの花嫁として迎えられる事を信じ、耐え抜いてきました。そのキリスト者達によって、今私達はイエス・キリストを信じる信仰を与えられています。

私達の信仰も、ただ、地上の安逸を求めるものでありませんように。 **再び来られる、イエス・キリストに目を注いで**、イエス様の**十字架の贖いに**、絶対的な**信頼を置いて**、イエス様にお会いするその時を思い描いて、一日いちにち、**誠実に真実に、生き抜いて**参りましょう。

お祈りを致します
憐れみ深い天の父なる神様

今年も世相は暗くありますが、待降節を迎える事が出来、有難うございます。

時代は愈々混迷し、暗さをまし、困難が予想されていますが、私達は創造主なる神様が、歴史の主であられ、イエス・キリストの再臨によって、全き神の国がもたらされる事を信じます。目を高く上げ、永遠の主を見つめ、希望に生きる者とならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。
アーメン。